




# 南山手の文学館

ベストセラーとして多くの人々に読まれ、今なおお色あせることのない文学作品を、明治、大正からそれぞれ1作品、昭和（戦後）からは児童文学を含め2作品を取り上げ、読み解きます。それぞれの時代状況を反映しながら、そのような時代に埋没せず、残り続けた文学作品の謎に迫ってまいりましょう。

- 時 間：13：30～15：30
- 場 所：南公民館
- 講 師：上出 恵子 先生
- 定 員：24人
- 受講料：無料

## 日程

回	期 日	学 習 内 容	備 考
1	4/19 (金)	◎開講式・オリエンテーション ○尾崎紅葉『金色夜叉』(明治30-35年) 尾崎紅葉の死によって未完となった『金色夜叉』は、明治30年～35年に「読売新聞」に連載されました。連載中から熱烈的な読者が多く、その求めに応じて複数の作家が書き継いだというユニークなものです。このような『金色夜叉』の魅力について確認します。	<b>持ってくるもの</b> ・筆記用具  講師 上出恵子先生  
2	5/17 (金)	○有島武郎『小さき者へ』(大正7年) 幼くして母を亡くした子どもたちに向けて書かれたもので、いわば有島武郎の私小説です。このような『小さき者へ』を取り上げつつ、その生き方も、またその死も話題となり、影響を与えた有島武郎という作家についても理解を深めましょう。	
3	6/21 (金)	○三浦綾子『氷点』(昭和40年) 昭和39年、朝日新聞社の一千万円懸賞小説の当選作である『氷点』は、新聞連載中から話題になり、〈氷点ブーム〉が起こりました。それから半世紀以上が経ち、〈昭和〉が遙か昔となった今も読者を獲得しています。このような『氷点』およびその源泉に迫ります。	
4	7/19 (金)	○灰谷健次郎『兎の眼』(昭和49年) □コミで広がり、ミリオンセラーとなった『兎の眼』は、灰谷健次郎の児童文学デビュー作です。〈子ども〉に軸足をおき、その独自性を明らかにした『兎の眼』は教育界をも巻き込みました。生きにくさを抱える子どもたちが増え続ける今、紐解きたい作品の一つです。 ◎閉講式	

- **申込方法**
    - ①往復はがきによる申し込み  
講座名、住所、氏名、年齢、電話番号、返信用のあて名を書いてください。
    - ②来館による申し込み（返信用はがきを持参してください）
    - ③ホームページの申し込みフォームによる申し込み
- ※申し込み多数の場合は抽選です。

● **申込期限** 令和6年3月31日（日）必着

● **申込み・問合せ先**

長崎市南公民館 〒850-0936 長崎市浪の平町7番19号  
TEL825-0295 FAX825-0294

スマートフォン  
はコチラから

